

内診台調査 プロジェクト 報告書

医療技術の開発／応用と社会の関係
についてのジェンダー分析

平成 18 年～20 年度科学研究費補助金基盤研究 (B)

課題番号： 18310169

研究代表者：柘植あづみ

目次

序章	1
0-1 なぜ内診台なのか	1
0-2 調査目的	2
0-3 内診台とは	2
0-4 調査内容	4
0-5 調査実施に関する倫理的配慮について	4
0-6 本調査に携わった研究者一覧	4
0-7 謝辞	5
第Ⅰ部 医療機関調査	7
第1章 産婦人科調査	9
1-1 産婦人科調査の概要	9
1-2 産婦人科調査の結果のまとめ	10
1-3 産婦人科調査のデータ一覧表	15
第2章 泌尿器科調査	43
2-1 泌尿器科調査の概要	43
2-2 泌尿器科調査の結果のまとめ	45
2-3 泌尿器科調査のデータ一覧表	47
第3章 国外医療機関調査	52
3-1 国外医療機関調査の概要	52
3-2 国外医療機関調査の結果のまとめ	54
3-3 国外医療機関調査のデータ一覧表	57
第Ⅱ部 メーカー・販売企業調査	81
第4章 内診台を製造・販売している企業および開発に携わった個人への調査	83
4-1 メーカー・販売企業調査の概要	83
4-2 メーカー・販売企業調査の結果のまとめ	84
4-3 メーカー・販売店企業のデータ一覧表	86
4-4 内診台開発に携わった個人への調査データ	96
第Ⅲ部 女性への調査	97
第5章 フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）調査	99
5-1 フォーカス・グループ・インタビューの概要	99
5-2 フォーカス・グループ・インタビューの結果のまとめ	103
5-3 フォーカス・グループ・インタビューのデータ一覧表	106
第6章 個人インタビュー調査	116
6-1 個人インタビューの概要	116
6-2 個人インタビューの結果のまとめ	117
6-3 個人インタビューのデータ一覧表	118
おわりに	130
参考文献	132
付録	
さまざまな内診台（写真）	i
内診台調査説明文書、協力同意書	iv
グループ・インタビューへの協力のお願い文書、協力承諾書	vi
内診台 FGI インタビュー・ガイド	viii

序章

0-1 なぜ内診台なのか

本報告書「内診台－医療におけるジェンダーと身体の政治」は、次の2件の調査プロジェクトの結果をまとめたものである。

まず、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア (F-GENS)」(2003 年度～2007 年度) のプロジェクト C として「医療・科学技術の進展と『身体・生殖・性別』の再構築」が設けられた。そのさらに下に C3 サブプロジェクトとして「ポストゲノム時代における生物医学とジェンダーに関する研究」を 2003 年に開始した。そこでの研究の一環として、2005 年から内診台調査に取り組んできた。ここでは主に、内診台メーカーや産婦人科と泌尿器科の医療機関の調査を 2 年間かけて実施した。また、イギリスとフランスの内診台についての情報も得た。

もうひとつは、2006 年から 2008 年にかけて、「医療技術の開発／応用と社会の関係についてのジェンダー分析」(平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究 (B)、研究代表者：明治学院大学・柘植あづみ、課題番号：18310169) という研究をすすめ、その一環として、内診台についての海外医療機関の調査(韓国、台湾、アメリカ合州国)、日本の内診台使用者である女性への個人インタビューとグループインタビューを実施した。

以上の2つの研究プログラムを助成いただいたことに、ここで深く謝意を示したい。

ところで、よく尋ねられるのは、「なぜ内診台を社会科学的視点から調査しようと思ったのか」ということである。この調査を始める発端となったのは、「ジェンダー研究のフロンティア (F-GENS)」の C3 サブプロジェクトの研究会に集ったメンバーが「医療とジェンダー」という切り口で共同調査を実施するためのテーマとして、まとめ役の柘植あづみが提案したことにある。

柘植がそれまでに実施してきた不妊治療や出生前検査に関する女性へのインタビューにおいて、産婦人科で内診台に乗る戸惑い、不快感について頻りに語られること、また、2004 年春から 2005 年夏までカリフォルニア州に滞在していた際に参加した、女性の視点からの自動車(コンセプト・カー)の開発についてのセミナーからヒントを得たことなどがきっかけだった。ただ、いったい内診台を調べて、それがどのように結実するかはわからないままでの提案だった。

内診台を調査対象にすることについては「女性が対象なので、ジェンダーという視点よりも『女性向け』という視点になり面白みがないのではないか」、「医療機器のようにハード面よりも医療者と患者のコミュニケーションなどの検討の方が重要ではないか」などの議論を経て、とりあえず、関心のあるメンバーが内診台のメーカーや産婦人科の見学をしようと思った。

柘植の提案に関心をもった小門穂と三村恭子が、まず海外の内診台の販売代理店の見学させていただいた。その報告を聞いた後に、また、複数の内診台がある産婦人科診療所をメンバー全員で見学させていただいた。

実際に始めてみると、日本の内診台の多種多様さに驚いた。さらに、小門と三村がそれぞれフランスとイギリスで調査したところ、フランスでは日本ではまったく使われていない白色の内診台の存在、さらにイギリスでは内診のために特化した診察台はないという結

果を得た。また、泌尿器科の検診台との比較によっても、あたらしい発見があった。

もうひとつ、日本ではほとんどのクリニックについている内診台に乗っている人と医療者を隔てるカーテン（内診台に乗って診察を受ける女性の恥ずかしさを緩和するためと説明されている）はフランスやイギリスにはなかった。

これらの成果を踏まえて、2006年春以降に、内診台と内診をめぐる環境についての国外との比較研究をすすめた。韓国調査では洪賢秀、台湾調査では張瓊方が中心となって調査を進めることができた。また、柘植が2004年に滞在していた米国カリフォルニア州でも、2007年に調査を実施した。

また国内の女性へのフォーカス・グループ・インタビューと個人インタビューは三村が中心になり、調査メンバーとそれ以外の多くの方の協力を得て実施した。

0-2 調査目的

「医学・医療におけるジェンダー」は、医療者とその利用者／患者の関係性だけでなく、医療機器の開発・設計・応用にも強く作用してきた。近年、男性の身体を医学の標準としてきたために、女性には使いづらく、より効果が低く、副作用や誤診等が生じやすい医療が成立しているとする批判的指摘がなされるようになってきている。

そこで本調査班は、産婦人科で日常的に使用されている内診台（産婦人科用検診台）を事例とし、その開発や利用において、女性の（丸ごとの）身体がどのように位置づけられているかを、医療機器の開発、医療者との関係、女性らしい振る舞いや羞恥心などといった文化的規範（身体技法・作法の違いなどを含む、文化的に規定された身体の検討）の観点から調査する。そして、調査結果を踏まえ、医療が女性の身体に注いできたまなざしと医療現場で実践されている（されてきた）こと、医療技術の開発・改良の方向性を定める要因などについて検討し、新しい医療技術とジェンダーの関係性における調査データを積み上げ、理論構築のための基礎資料を提示することにつなげていきたい。

0-3 内診台とは

一般的に内診台と呼ばれる産婦人科用検診台は、通常の診察台と異なり、受診する者を高い位置で仰向け・開脚の姿勢に固定する役割を持つ。日本国内においては、内診（膣内の触診）をはじめ、子宮がん検診のための組織の採取、経膣超音波検査やコルポスコピー（膣拡大鏡を用いた検査）といった画像診断検査、そして、錠剤の挿入やIUDの装着などといった簡単な処置を行なう際に用いられる。

内診台は大きく分けて、通常の診察台が上半身から臀部まであり、下半身部分は足を乗せる器具（支脚器）がついたものと、いすのような形から診察台状に変形するものがある。台状のものはさらに、踏み台を使ってのぼる必要がある、高さのあるもの（固定ベッド型、電動の機能は一切付いていない）と電動で台を上げ下げできるもの（昇降ベッド型、台の背中をもたれる部分の角度を電動で調節できるものが多い）がある。いす型の内診台については、単にいすが上がり台状に変形するもの（昇はいす型）、いすが着替えの場所や受診者用の入り口から目隠しのカーテンの前まで水平に回転してゆき、その後上がって台状に変形するもの（回転いす型）、いすが目隠しのカーテンの前まで前進してゆき、その後上がって台状に変形するもの（前進いす型）がある。いす型はいずれも、診察後にスイッチを入れれば逆の順番で動き、いす型に戻って元の位置で停止する。それぞれのいす型内診台

の動きについては、図2を参照いただきたい。

このほか、厳密にはこれらの分類に当てはまらない内診台が幾つかある。そのうち、国産のもので、本調査で訪問した診療所でも使用されていたのが内診・外診兼用台である。これは電動で高さを調節できる、通常の足先まである診察台のような形状をしているが、足部分は縦に二つに分かれており、内診が必要な時だけ水平方向に開くことができる。これらの内診台の形状をおおまかに図1に示した。

図1：内診台の種類・動き方（作図 三村恭子）

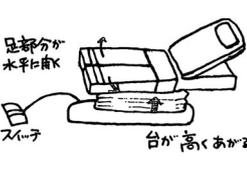
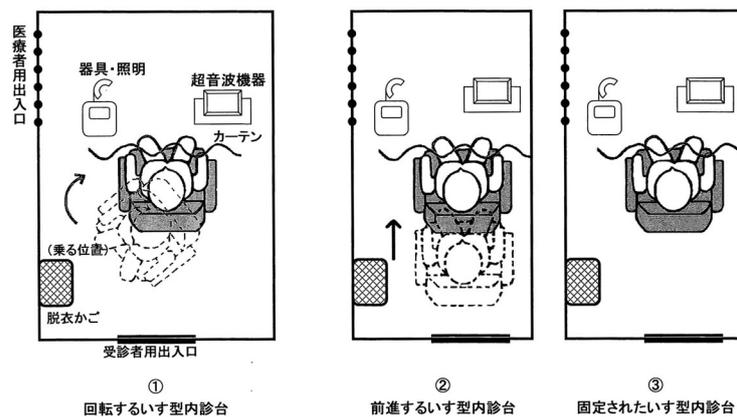
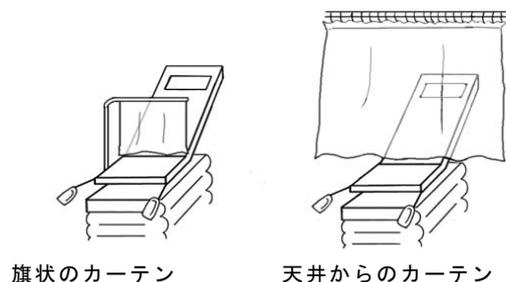
固定ベッド型	昇降ベッド型	いす型	内診・外診兼用台
			

図2：いす型内診台の動き方（三村ほか2008、p229より）（作図 三村恭子）



①の内診台を設置するには、いすの回転に必要な面積を確保する必要があるが、②と③のタイプはより狭い空間に設置することが出来る。

図3：カーテンの付き方（三村ほか2008、p228より）（作図 三村恭子）



先に述べたとおり、内診台の上には、通常目隠し用のカーテンがかかっている。このカーテンにも2種類あり、内診台に設置された旗状の、比較的小さなものと、天井から下がったものがある。

以上、簡単に内診台の形状について説明した。後ほど報告書本文において、より詳細に記述していくが、ここでは、内診台がどのようなものでどのように動くものかを読者に把

握しておいていただきたい。そして、「内診台に乗る」ということが、例えば、下着を脱いで性器部を露出することに伴う受診者の羞恥心や、開脚姿勢で固定される屈辱感、あるいは、カーテンの存在によって受診者と医療者との間のコミュニケーションが、ほかの医療行為と異なる特殊性を持つこと、それにもかかわらず、産婦人科外来では日常的に使用されるものであり、受診する女性は多かれ少なかれ内診台に慣れるべきであることなどと深いつながりを持つイベントであり、その状況を構成する主たる要素として内診台が存在していることを理解しておいていただきたい。

0-4 調査内容

上記の調査目的のために、以下の調査を実施した。

- ① 産婦人科史、羞恥心や診療環境に関する先行研究、薬事法などについての文献調査
 - ② 内診台を製造および販売している企業へのインタビュー調査
 - ③ 内診台を使用している医療者へのインタビュー調査
 - ④ 内診台に乗った経験のある女性へのフォーカス・グループ・インタビュー（FGI）調査
および個人インタビュー調査
 - ⑤ 海外における内診環境、とりわけ内診台の使用状況についてのインタビュー調査
- 本報告書では、これらの調査結果について、章ごとにまとめながら、順に報告する。

0-5 調査実施に関する倫理的配慮について

お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム『ジェンダー研究のフロンティア』（以下、F-GENS）で行なった調査は、お茶の水女子大学研究倫理委員会の承認を得ている（研究題目：「医療技術の開発と女性の身体へのまなざし—産婦人科内診台を事例として」調査）。また、科研費で行なった追加調査に関しても、F-GENS での調査に順じて実施している。

0-6 本調査に携わった研究者一覧

所属の表記は、現在の所属先、F-GENS におけるポジション、科研費研究での役割とした。

^{つげ} 柘植あづみ 明治学院大学社会学部、教授

F-GENS、C プロジェクト事業推進者、C 3 サブプロジェクト・リーダー
「医療技術の開発／応用と社会の関係についてのジェンダー分析」（平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究（B）、課題番号：18310169、以下では科研費プロジェクトと省略）研究代表者

^{こかど} ^{みのり} 小門 穂 京都大学大学院人間環境学研究科博士後期課程、東京医科歯科大学生命倫理
研究センター、非常勤研究員
F-GENS、C3 サブプロジェクト研究協力者
科研費プロジェクト研究協力者

^{ほん} ^{ひよんすう} 洪 賢秀 東京大学医科学研究所公共政策部門・特任助教、東京国際大学・経済学部、
非常勤講師

F-GENS、C3 サブプロジェクト研究協力者
科研費プロジェクト連携研究者

ちやん ちよんふあん
張 瓊方 東京大学医科学研究所公共政策部門、特任研究員

F-GENS、C3 サブプロジェクト研究協力者
科研費プロジェクト研究協力者

みむら きょうこ
三村 恭子 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程

F-GENS、C1/2/5 サブプロジェクト RA
科研費プロジェクト研究協力者

0-7 謝辞

本調査で行なったインタビュー調査には、次の方々および機関にご協力いただいた。いずれも、多忙な中、時間を割いて、丁寧に説明したり意見を述べていただいた。ここに深く感謝を申し上げる。

なお、本報告書では、医療者・医療機関、内診台に乗った経験のある女性に関しては、全て匿名としている。また、企業や開発に関わった個人に関しては、原則として匿名としたが、製品に関してはメーカー名を記載しないと調査結果の内容がわからないことがあり、その場合には製品名や企業名を記載した。

なお、次の方々には、本調査の実施に際して貴重な助言と協力をいただいた。ここに深く感謝申し上げます。

武藤 香織 さん
東京大学医科学研究センター、公共政策部門准教授
F-GENS、COE 客員研究員
科研費研究分担者

仙波 由加里 さん
F-GENS、COE C3 サブプロジェクト PD 研究員（2003-2004 年度）
科研費研究協力者

佐藤（佐久間）りか さん
F-GENS、C4 サブプロジェクト研究協力者

水島 希 さん
F-GENS、C1/2/5 サブプロジェクト PD 研究員

堀口 雅子 さん
産婦人科医師

絵野沢 伸 さん
歯科医師
国立成育医療センター研究所研究員

また、個々のお名前は記さないが、多くの方の事務作業の協力があったこの成果をまとめることができた。この場を借りてお礼を申し上げます。

